

令和7年度第2回 名古屋市新たな劇場の整備・運営等検討懇談会 質疑応答及び意見交換議事録

日 時：令和8年1月7日（水）10時00分～12時30分
場 所：中日ホール&カンファレンス Room1
出席者：懇談会委員8名及びオブザーバー2名、事務局4名
(詳細は末尾「出席者名簿」のとおり)

1 進行

- ・開会
- ・資料説明 議事(1) 前回からの継続検討事項について
- ・議事(1)についての質疑応答及び意見交換
- ・資料説明 議事(2) 新たな劇場に求める性能等について
- ・議事(2)についての質疑応答及び意見交換
- ・閉会

2 議事(1)についての質疑応答及び意見交換（事務局による資料の説明終了後）

福島座長

（議事(1)について）

ご意見・ご質問等ありましたらお願いしたい。

林委員

新たな劇場が2035年度に開館予定であることを考えると、2027年度予定の事業者選定時に具体的な組織図を描くのは難しい。事業者選定後の7年間で、事業者が提案書に沿ってどのように組織を築いていくのか、プロセスをチェックできる仕組みが必要である。専門人材の提案時、著名人の名前が書かれただけの提案書では審査が難しいので、オペレーションの考え方も併せて提案させるのが望ましい。「開館何年前にはおおよそこの組織図」といった形で、フェーズごとの組織図を示す提案があると現実的に考えやすい。ドリームプランを提案するだけで実現はできなかった、とならなかったための工夫が必要である。組織構築のためには人集めのみならず、現市民会館からの継続性担保、メンバーのチームビルディング、事業団や名ファイル、CLNとの協議等、さまざまなプロセスが必要となる。人口減少が加速する中、10年後の環境を見据えた運営ができるとよい。

事務局（安達）

ご指摘のとおり、提案から開館までの期間が長いため、提案時に専門人材の具体名等を求めるることは現実的ではなく、どのような能力を持った人材を登用するかを提案いただく形を想定している。開館前に提案書に示すとおりの組織が築かれているか、という点は市としてしっかりと見ていくたい。継続性の担保や連携についても、提案

が絵に描いた餅とならないよう、市として事業者との協議や評価が必要になると考えており、要求水準書の記載も工夫したい。

福島座長

新たな劇場のミッションを達成するため、どのようなプロセスで組織を築いていくかといった考え方を押さえて、おくことが重要と感じた。

西川委員

日本の組織は、トップを立ててその指示に従う形になることが多いが、カラーは出しやすい。アメリカの組織は、チームとして共通のゴールを見据え、そのために小さなゴールを細かく設定しながら運営していくため、責任者が誰であろうとゴールに向かっていかなければならぬ。こうしたゴールは大きく、広く設定されることが多いが、日本の行政だと何かを捨てるという判断をすることが難しい。総合プロデューサーを決める前に、このプロジェクトを進行管理するプロデューサーが必要になるというイメージを持っている。

事務局（安達）

市として新たな劇場のゴールをしっかりと示しつつ、事業者にも組織作りや専門人材について、提案や協議の中で検討いただきたい。

事務局（堀）

プロジェクトの進行を担うプロデューサーは市の役割と考える。新たな劇場として何をしていきたいかという点を明確化するのは我々の責務と考えている。

梶田委員

p4 に記載されているワークショップ、アウトリーチ、アートマネジメント等の用語は、10 年後にはおそらく解釈が変わっていると考える。例えばアートマネジメントは、2000 年代に日本に導入されてから考え方方が変わってきており、今後も変わっていくと考えられる。用語と社会の動きをリンクさせて解釈できる事業者に運営いただけることが望ましい。用語の背景となる考え方や根底にある発想が見落とされ、表面的に解釈されてしまうことを懸念している。

事務局（安達）

ご指摘のとおり、社会から求められることも日々変わっていくと認識しており、初めから事業の回数や実施方法を決めきるのではなく、社会情勢に合わせて柔軟に協議できるような要求水準としていきたい。

福島座長

p5 の色分けの意図と、自主事業部門、舞台技術部門等、部門間の役割は明確に分かれているのかを確認したい。

事務局（安達）

専門人材を緑色、役職者レベルを青色、担当者レベルを灰色、事業団を橙色で表記している。組織図は縦割りに見えてしまうが、民間事業者からは役割やリスク・責任分担を明確化してほしいという声をいただいている、一旦は部門を明確に分けています。ただ、総合プロデューサーによる統括の下、部門間や、PFI事業者と事業団の連携がしっかりと行われるよう促したい。

福島座長

細かな組織図を作成する段階ではないと思うので、市として組織に求めるものをしっかりと示し、柔軟性のある組織を築くことが重要である。p4のPFI事業者と事業団の役割分担について、2~3行でもよいので分担の考え方や意図を記載いただけます。

勝又委員

p5の組織図におけるコーディネーターの位置づけやエデュケイターとの違いが気になる。

事務局（安達）

コーディネーターの役割は、基本計画では新たな劇場とまちをつなぐことと記載しております、まちづくりと連携しながら、劇場とアーティスト等とのつなぎ役となることを期待している。エデュケイターは、第1回検討懇談会でワークショップとアウトリーチがただ場所を変えて同じことを行うものとすべきでないという意見があったことも踏まえ、事業を企画するための知見や資質をもった人材を想定している。その役割をコーディネーターが担うのか、責任者や担当者レベルが担うのかは今後の検討事項だが、組織全体としてエデュケイターの資質を備えていただきたいと考えている。

梶田委員

コーディネーターと事業団の連携はどのように想定するか。ワークショップやアウトリーチにおいて、どのように関わるのか。

事務局（安達）

コーディネーターは、事業団と協力しながら金山エリア周辺の地域団体や市内の文化芸術団体とのつながりを構築し、事業団もコーディネーターの知見やネットワークを活用しながら、アーティスト等とのつながりを強化していくことを想定している。

梶田委員

組織図では事業団とPFI事業者の関わりがないようにも見えててしまうため、p4の役割分担を反映することは可能か。特にエデュケイターは地域密着の取組が中心となるため、事業団と連携していくことになると思う。

西川委員

福島座長ご指摘のとおり、役割分担の意図を明示することには賛成である。組織図はこのままでもよいと思うが、ゴールに向かって誰が何をやるのかを示した役割分布図のようなものがあると望ましい。また、多様性が満ちあふれてくる社会に対応できる人材をどこに位置づけるかという点がわからない。地域や近所との付き合いが希薄となり、ネットだけでつながる人も多くなっている中、なんとなく時代に合っていないのではないかと考える方も多いのではないか。

福島座長

人材だけではなく、変化に対応できるチーム、組織づくりが重要であると考える。

勝又委員

プロデューサーやディレクター等の人材が提案で示されるかと思うが、その前に人材の発掘プロセスのようなものがあるとよいと思った。事業者が発掘方法を提案するかもしれないが、発掘するためのプログラムを、市として早い段階で実施することも考えられる。梶田委員のご意見を伺いたい。

梶田委員

劇場の外で行う活動は、開館までの 10 年間でスタートしていくと思う。コーディネーターやエデュケイターの人材はかなり探すのが難しいが、ゼロではないため、人材獲得プロジェクトのようなものはどこかで用意しておく必要がある。大きな事業を行うプロデューサーより、地域密着事業の担い手の方が圧倒的に少数であり、背景として、小規模事業を行うだけでは生計を立てるのが難しいという点がある。プロデューサーがエデュケイターの資質も兼ね備えているケースが多いが、本来はエデュケイター単独で役職として成立するのが望ましい。海外では劇場にもオーケストラにもエデュケイターが所属しており、エデュケイター同士が情報交換をしてまちを盛り上げていくシステムもある。こうしたことを目指す形で人材獲得に取り組んでいただけるとありがたい。特に遅れがちな部分と思うので、今から目を凝らしながら、どのような人材がいるのかリストアップすることも含めて検討いただくとよい。

福島座長

人材育成を新たな劇場のミッションとするのであれば、雇用にもつながり、その人材がまたトレーナーとして全体を育てていくというプロセスが出てくると思う。

林委員

新たな劇場の今後のあり方やプロジェクトを進める上での考え方をしっかり発信するということが重要と考えている。基本構想や基本計画を読んで理解できる若者は多くないと思うので、事業者にそれらを噛み碎いた形で発信いただければ、興味をもつ方が増えると考える。

3 議事(2)についての質疑応答及び意見交換（事務局による資料の説明終了後）

福島座長

(議事(2)について)

ご意見・ご質問等ありましたらお願ひしたい。

西川委員

舞台面について、迫り、花道、回り盆といった独特な舞台の話があつたが、回り盆や花道は歌舞伎公演によって生まれたものである。回り盆は、元々は芝居小屋のような小規模な劇場で、地下にいる人が回していたが、現在の大規模な商業劇場では電動式になっている。二方飾り、三方飾りといった形の場面を瞬時に転換する際に使われ、歌舞伎や商業演劇等に用いられる。日本舞踊では、所作舞台を置く場合は回り盆を使わぬが、迫りやすっぽん、花道はよく使う。回り盆は、津市の劇場では使えるが、愛知県芸術劇場では使えなくなった。個人的に回り盆は、機械式ゆえにずっと使えるものではなく、メンテナンスにもかなりの経費がかかるため、現実的に考えると設置しない方がよいのではないかと考える。基本計画に掲載されていたことも驚いた。

伝統芸能の舞台としてもっとも理想とされるのが国立劇場の大劇場だが、花道が長く、サイトラインもなだらかだったと記憶しているが、花道はサイトラインが確保されない平らな劇場で生まれた機構であるため、西洋的な客席だとさまざまな矛盾が生じてしまうことも指摘しておきたい。

照明や音響について、著名な方のプロデュースしたものや過度にしゃれたものを設置すると、後々使いにくくなることがある。愛知県芸術劇場でも、照明が著名な方のプロデュースによるものだったが、実際はあまり使うことができず、後からさまざまな機材を追加していると聞いている。複数の専門業者に取材をした上で、より現実的な設備を選定いただきたい。

最後に、所作舞台は置いていただきたいのと、音響機構として使用するため大太鼓は残していただきたい。

福島座長

議論の進め方として、まず施設全体のあり方や総括的な話について勝又委員や林委員から意見をいただき、その後他の委員より、使い手の立場からそれぞれ意見をいただくということよいか。

また資料で気になった点として、現市民会館の課題をどう解決するかという点がまとめられていたが、全く新しいものを作ることになるため、あるべき姿を描いた上でプロセスを考えていくことが重要と考える。建設費が限られている中ですべてを実現することは難しく、取捨選択も必要となる。第1ホールを聴くホール、第2ホールを観るホールとする場合に、それぞれで何を大切にするのかを明確化する必要がある。その際、新たな劇場以外のホールも意識し、何を強みとしていくかを考えた上で優先順位づけをしていくことで、要求水準書の書きぶりが定まっていくのではないか。

勝又委員

現市民会館は舞台の広さが確保されており、搬出入口も舞台レベルにあり、かつ直結しているので使いやすい。楽屋も量的には十分確保されている。音漏れやサイトライン等の問題はあるが、時代的に見てもしっかりと考えられたものだと思う。

舞台の広さをどうするかはポイントとなるが、色々な施設を見学していると、1面半でもよいとは思う。Hitaru（札幌文化芸術劇場）やハレノワ（岡山芸術創造劇場）は、いずれも再開発ビル内に位置しており条件の厳しい場所であるため、舞台面の広さは参考としにくい。福岡市民ホールの整備については、案の選定にあたって自身が委員を務めていたが、もう少し舞台の面積を確保してもよかったですとは思っている。

搬出入口について、最近のホールはエレベーターを用いることが多く、使いにくさは指摘されているが致し方ない部分もある。

第2ホールの花道やサイトラインをどうしていくかは課題と考える。新国立劇場では、現在ちょうど4回目の歌舞伎公演をやっている。1回目は花道を脇花道で代用しており、批判の声も聞かれたが、2回目には仮設花道を設け、脇花道のところに鳥屋口を設けており、うまい手ではあると思った。新たな劇場でも鳥屋口のあたりを備品としてもっておくことはよいと考える。この事例だとすっぽんはないが、今の技術であれば、同じように花道を作ってすっぽんを仕込むことも十分可能である。りゅーとぴあ（新潟市民芸術文化会館）は客席勾配の問題から仮設の花道となったようである。最近はサイトラインに関するクレームが多く、例えば愛知県芸術劇場コンサートホールの3階席から舞台が見えにくくなっている。クレームにより、完成してから客席をかき上げするケースもあるので注意した方がよい。楽屋の設えとサイトラインは関連が強く、新国立劇場や茨木市のおにクルのように、客席の下に回り込む形で楽屋を設けることがある。第2ホールの客席勾配が緩いと難しいが、できる余地があればプランニングはしやすくなる。

林委員

2つのホールの配置に関する話だが、会場前の待機列を想定した提案が必要と考える。開かれた劇場というと、設計者が「意図しない出会いが新たな芸術を生み出す」といった考え方からすべてをオープンにしてしまうことがあるが、現場は苦労することになる。よいデザインは合理的な設計にプラスされる価値として提案してほしく、審査基準もそれに沿ったものであってほしい。

遮音壁を採用するのは当然だが、Box in Box 構造（浮き構造）は全施設に施さなければ、音漏れにより共有スペースが使えなくなることがある。コストカットのために省略されることが多いため、仕様の中で各施設をどのように防音・防振化するかを明示いただきたい。

舞台機構については、建設費高騰の話もあったが、オペレーションを担う人件費、保守点検・修繕費等のランニングコストも考慮した提案を求めたい。この考え方は、搬入口や荷捌きスペース、備品倉庫、ピアノ庫への動線等にも共通している。昨今の人手不足や働き方改革により、早貸しや延長に対応できない劇場が首都圏で増えており、搬出入がボトルネックとならないような設計を提案いただきたい。

過去に議論のあったインキュベーション機能について、事業者が事業団と組んでソフト事業を展開することになると思うが、後で困ることにならないよう、ある程度の余地を残した設計を提案いただけないとありがたい。

事務局（平岡）

現市民会館の課題を強調した資料にはなっているが、当初国立劇場をしのぐ大ホールと報道されており、我々としても誇りをもって管理してきた。

サイトラインを上げることで下の空間を活用できるという点はまさにご指摘のとおりであり、限られた敷地の中でも事業者が合理的に機能を配置できる要求水準書としていきたい。

待機列や開放性の話についてもご指摘のとおりで、開かれた劇場とは言いつつ、チケットを持った人しか入れない特別な空間を設えることが重要と認識しており、空間をつながっているように見せることが設計者の腕の見せどころだと考える。セキュリティや有料/無料エリア等の区分は劇場として当然に必要なことであるため、留意したい。動線についても、ピアノ庫から袖舞台までに角が何か所あるか等、当たり前だが見落としがちなポイントも意識しながら進めたい。

事務局（安達）

林委員からご指摘のインキュベーション機能について、提案段階で求める水準、事業者選定後の事業団を交えた設計協議等について検討しているところである。

PFI・BT0方式を採用しているため、維持管理・運営の視点をハード面に反映させることは、提案評価、事業者選定後の協議の場面でも求めていきたい。

松岡委員

愛知県芸術劇場の大ホールは座席数を多くしているために、上の階のサイド席からは舞台が半分しか見えず、場合によっては舞台袖待機している演者が見えてしまう。5階席の上段からだと人形劇のように見えてしまい、かつ傾斜があり怖さがある。2,000席ちょっとで十分と考えており、我々が使用する際は5階席の正面にシャッターを下ろし、使わないようにしている。サイド席の画角はもう少し見やすいものにしてほしい。

搬出入について、舞台袖にトラックを横付けすることができると、スタッフの作業時間が短縮できる。現市民会館のように、屋外から大きなものを運んでくるのには時間がかかる。大阪のフェスティバルホールでは11トントラックを横付けすることができる。

第1ホールはオペラや全幕のバレエが中心だが、第2ホールは実験的な公演やコンテンポラリー公演が想定されるため、照明が充実していないと作品のよさが生きない。現在はフラットだが、客席傾斜があった方が照明も見やすくなる。

現市民会館では地下楽屋となっているが、上り下りが大変である。また、床に上手・下手の方向が記されているが、それでも迷っている人が多く、劇場の同じ側面や客席の後ろ側に楽屋があるのが望ましい。楽屋にモニターが設置されていないため、舞台

で何をやっているかが把握できない点も課題である。畳の楽屋もあるが、テーブルの高さが中途半端で設置意図がわかりにくい。ただ畳にするということではなく、実際の利用者の意見を取り入れながら適切なものを検討いただきたい。

遠藤委員

大ホールはプロモーター等による貸館利用が7~8割になると思うが、スピーカーや照明機材は基本的に持ち込みとするため、劇場としてどれだけよい機材を設置しても、7~8割は使用しないということになってしまう。その他も講演会や落語等のアマチュア利用が多く、よい機材が本当に必要なのはよく検討してほしい。

また、24時間使える施設とすることは絶対条件と考える。現市民会館では、搬出入に伴う騒音により劇場職員が近隣住民からの苦情を受ける姿を何度も目にしており、こうした問題の生じない設計としてほしい。現市民会館では金・土・日曜日の利用が多いが、日曜日の公演に向けたリハーサル・準備等のために土曜日の夜と日曜日を押さえるといったケースが多く、土日で違う演目ができなくなっているため、早朝から仕込みを行えるようにしてほしい。

概算事業費約580億円とあるが、福岡市民ホール等、他の施設の事業費の事例がわかると、金額のふさわしさを比較検討することができる。工期についても7年間の想定としているが、ゼネコンが例えれば6年間で完成させる提案をする可能性はあるか。7年間かけなくともよい可能性があれば検討していただきたい。

今ではエレベーターによる搬出入も当たり前になってきているが、トラックが2台、3台付けられたとしても、エレベーターに載せられる分しか1度に運ぶことができないため、11t車両がスムーズに通ることができれば問題ないと考える。搬出について、上階の荷物を下ろす際、 トラックに積む順番に下ろすことができないため、搬入の倍の時間がかかるてしまう。そのため、 トラック面にも十分な荷捌きスペースを確保してほしい。

また、愛知県芸術劇場と現市民会館を比べると、脇花道の有無も大きな問題と考える。スピーカーを設置する際、サイドにすぐ客席があり見切れてしまうことがあるが、脇花道に設置することができれば見切れが生じない。最初から1階の最前列のチケットが売れなくなるような設計にはしてほしくない。

西川委員

脇花道は歌舞伎や演劇で使うことがあり、地方の会館には多く見られる。

遠藤委員

脇花道は愛知県芸術劇場ではなく、最近の劇場にもないことが多いと思う。我々としては、脇花道としてというよりは機材の設置スペースとして利用しているのが実態であり、機能について再検討していただきたい。ポップスのコンサートが全体の7~8割程度ある場合、多くのプロモーターが同じような感想をもつと思う。

西川委員

脇花道はスピーカーの設置を含め、さまざまな用途で使われているのが現状である。東京建物 Brillia HALL (豊島区立芸術文化劇場) でも設けられていない場合があり、機能は検討すべきと考える。

事務局（平岡）

新たな劇場において、大ホールの脇花道は存続させることになると思うが、第2ホールは花道の設え次第で脇花道の有無が決まつくると考える。

福島座長

事業者へのサウンディングを通じて調整いただきたい。

小出委員

現市民会館のさまざまな課題を改善いただいており、期待が高まっている。ホールのもっとも重要な機能は音響であり、どれだけ設備が整っていても音響がよくないと利用頻度が落ちてしまう。多少設備に問題があっても、音響がよければオーケストラとしては利用する。

空調も重要であり、現市民会館は夏場には非常に暑くなる、冬場には寒くなる、隙間風により楽譜が飛ぶといった課題がある。付属設備についても、全国的にはオルガンを備えているホールが多く、現市民会館でも使用機会があるため、電子でもよいので備えていただきたい。

また、ピアノ協奏曲の公演前の指ならしのため、楽屋にピアノを設置いただきたい。

開かれた劇場という観点から、乳幼児がホールに来た際の対応も考えてほしい。未就学児の入場を断ることも多く、託児業者に子どもを見てももらっているが、そのためのスペースを設けていただけるかも気になる。現在は地下の楽屋を使用しているが、子どもが恐怖感をもつことが多い。専門スペースではなく多目的スペースでもよいので設けていただきたい。また、客席にも親子席を設けることを検討してほしい。

遠藤委員

愛知県芸術劇場には、2階席後ろに親子室があるが、行くのに階段を使わなければならない。障害者や車椅子の方も利用できるような個別のスペースや部屋が必要と考えており、バリアフリーは検討いただきたい。

梶田委員

近年は、さいたま芸術劇場の車椅子ダンスのように、公演の出演者にも障害者が増えているため、楽屋のバリアフリーやスペースも十分に考慮してほしい。

概算事業費の580億円についても、アジア大会、名駅再開発等の事例を踏まえると、不確かさがあると思う。

福島座長

ここ数年で、他の事例が全く参考にならないほど状況が変化してきており、見通しは慎重に考える必要がある。優先順位もしっかりと考える必要があるが、第1、第2ホールについて、それぞれ聴くホール、観るホールとして何に重点をおくべきか伺いたい。多目的ホールではありながらも、両方に同じ機能を持たせるとコストがかかりてしまう。

西川委員

盛りだくさんの計画で予算も大きいため、拡散していくべき時期、収束していくべき時期の両方があると思う。人口減少に加え、劇場に行く人々の年齢層が高くなってきたおり、大学で授業をしていても、ライブに行ったことがない学生がほとんど聞く。アウトリーチ等、地域との関わりを築く中で、劇場という同じ場を共有することの重要性を伝えていくことが必要である。10年後を見据えて考えていく必要のある、非常に難しい課題だと思う。専門家の意見も聞いてほしいが、昔の劇場に慣れてしまっている部分もあり、その頃とは状況も大きく変わっている。また最初に指摘したとおり、このプロジェクト自体をプロデュースし、ゴール作りをしていく人材が必要と考える。プロダクトアウトではなくマーケットインで考えていく必要があり、その際も10年、50年、100年後のマーケットを見据える必要がある。あらゆるもののが多様化していく中で、新たな劇場についても、建設費の高騰や税金を投入していることを考えると、誰かにとっては重要なものでも、全体的な観点から削り、収束させる判断をする必要も出てくる。その点にプロデュース力が求められると考える。

遠藤委員

西川委員とは逆の意見であり、市民会館は人口減少や少子化が進んでも、一番最後まで使われる利用率の高い会場と考えている。予算を多く確保してよいものを作り、後世に残していくべきである。10年後、50年後に、近郊都市の施設の利用率が低くとも、市民会館の利用率は90%以上に保たれていると思う。利用料金を10%引き上げてでもよいものを作る、というのは1つのアイデアとして考えられる。名古屋市の将来世代も結局市民会館を使っていると思うが、予算を削ったことを後悔するより、いいものを作つてよかったです、と感じられるような施設としてほしい。

福島座長

遠藤委員のおっしゃったとおり、24時間使える施設とすることで稼働率を実質的に上げ、収益を確保する等の工夫を、事業者の知恵も含めて検討していく必要があると感じた。小出委員ご指摘のとおり、第1ホールは聴くホールとして音響を大切にしてほしい、環境をコントロールしていくことは欠かせない。第2ホールについて、大迫り一基でよいのかという点は気になったが、委員の意見を伺いたい。

勝又委員

迫りはあまり作り込みすぎない方がよいと思う。最近は迫りがないホールも多く、

大規模なものになるとイニシャル、ランニングコストが高くなる。演出に使うのか、道具迫りとして使うのかを判断する必要がある。迫りを使う機会があるか、委員の皆さんに伺いたい。

遠藤委員

使わない。

松岡委員

バレエでも使わない。

福島座長

専門的な立場からすると、音響や静肃性能への意見はあったが、それ以外の部分で現在の要求水準はある程度妥当という理解でよいか。

西川委員

先ほど申し上げたとおり、メカニカルな設備は壊れやすく、時代とともに古くなっていく。現在だと LED が増え、海外のホールでも大量に設置されていたことがあったが、持ち込みの LED を使うことも増えているし、日進月歩で変わっていくものは作り込みすぎない方がよいと考える。ビジョンや映写を使うことも増えている中、迫り等のメカニカルなものは減ってきている印象がある。

林委員

第 1、第 2 ホールについては、現市民会館の需要をしっかりと満たすことが起点となっているため、課題をクリアすることは外さなくてよいと思う。プロユースで考えるか、アマチュアユースで考えるかにより、設計も変わってくる。第 2 ホールは、観る・魅せるホールを踏襲した上で、アマチュアフレンドリーとし、第 1 ホールはプロの利用に堪えるものとしてほしい。プロは箱があればどのようにでも対応できるが、アマチュアは技術スタッフ等をはじめある程度のサポートを要するため、必要な設備も変わってくる。

また、第 3 ホールや芸術創造センター等の施設を含め、市内の劇場をどのようにグランドデザインしていくのかという点については、文化芸術推進評議会とも連携しながら議論・決定していく必要があると感じている。

事務局（平岡）

新たな劇場の大きな冠は多目的ホール、ということは忘れてはいけないと考える。p18 の赤字や米印の部分は初出しの情報だが、仕様を工夫して実現できる方法を検討していきたい。

事業費や工期については、整備事業者へのサウンディングを通じて、580 億円という金額、周辺インフラの整備等を含めた事業費を精査していく。机上の数値と市場における実態の乖離を把握していきたい。

梶田委員

鑑賞者育成は非常に重要な観点である。芸術大学においても、オンライン鑑賞の経験しかない学生が多いというのが実態である。SNS でさまざまな情報が拡散されている中でも、実際に足を運ぶきっかけとなるのは「誰かに誘われたから」であり、誘われたら行く層を開拓していくことは重要である。名古屋市は習い事人口も多く、それがそのまま鑑賞人口になるということもないが、鑑賞人口になりうる層ではあるため、そうした人々へのきっかけづくりを行っていくことで、開かれた、誰も排除しない劇場につながっていくと考える。

勝又委員

要求水準書には書きにくいが、事業者との話し合いの中で技術の進歩や社会情勢に合わせた対応を求めていく必要があると考える。最近の劇場は仕上げの質が高くなく、多少質が低いのは致し方ないが、少なくとも空間的に余裕をもったものを作つてほしい。余裕をもった設えでなければ、50 年間使えなくなる可能性がある。舞台機構、音響、照明は、設計時に作り込みすぎると、オーバースペックとなり予算が合わなくなることがある。作り込みすぎず、時代に合わせて変えていくことが重要である。プロの使う第 1 ホールは設備を入れすぎなくてもよいが、アマチュアが使う第 2 ホールはある程度作り込む、程度の方針を示し、コストを下げられる余地を作つておかないと、要求水準の柔軟性がなくなる。劇場のスペックを検討するにあたっては、聖域を設けず、プロジェクト全体を総合的に考えていくことが必要である。

遠藤委員

もっとも懸念するのが、現市民会館が閉館し、新たな劇場が入札不調等によって予定通りに完成しないことである。予定通りに完成しなかった場合は、現市民会館を延長して利用できるようにしていただきたい。中野サンプラザも、建て替えが白紙となったときには内装を壊してしまっていたため、継続利用ができなかつた。建設費の高騰により事業に参画する会社がいるかどうかわからない中、何かが起きたときにも使えるような体制を整えてほしい。

福島座長

特にコスト面でこれまでとは次元の異なる検討が必要であり、作り込みすぎることが難しい時代になっている。遠藤委員のご指摘のとおり、さまざまなリスクシナリオを考え、名古屋市内の文化芸術の機会が保障することが非常に重要である。最初から作り込み過ぎないことが重要であり、コストが上がっても柔軟に交渉ができる余地のある要求水準書を作つていくべきである。今後状況が厳しくなれば、また新たな基準で取捨選択をしていかなければならない可能性がある。

4 閉会

以上

名古屋市新たな劇場の整備・運営等検討懇談会 出席者名簿

懇談会委員

氏名	役職等
遠藤 けい	(株)サンデーフォークプロモーション コンサート本部長
梶田 美香	名古屋芸術大学芸術学部 教授
勝又 英明	東京都市大学 名誉教授
小出 篤	名古屋フィルハーモニー交響楽団 演奏事業部長
西川 千雅	日本舞踊 西川流四世家元
林 健次郎	宮城県文化振興財団新県民会館開館準備室長
福島 茂	名城大学都市情報学部 教授
松岡 璃映	松岡伶子バレエ団 主任ミストレス

五十音順、敬称略

オブザーバー

氏名	役職等
前川 滋美	名古屋市住宅都市局 まちづくり企画部長
島崎 逸哉	名古屋市文化振興事業団 事業部長

事務局

氏名	役職等
荒井 敦徳	観光文化交流局文化歴史まちづくり部長
堀 啓輔	観光文化交流局文化歴史まちづくり部担当課長 (文化施設に係る企画調整等)
安達 陽平	観光文化交流局文化芸術推進課課長補佐 (文化施設に係る企画調整等)
平岡 慶一	観光文化交流局文化芸術推進課課長補佐 (市民会館の整備)